

高等学校

平成 8 年 度

教育研究員研究報告書

芸術（美術）

東京都教育委員会

平成 8 年度

教育研究員名簿（芸術・美術）

学 校 名	氏 名
都 立 大 森 東 高 等 学 校	◎ 今 村 孔 久
都 立 明 正 高 等 学 校	○ 臼 井 麻 美 子
都 立 玉 川 高 等 学 校	野 崎 敏 也
都 立 大 山 高 等 学 校	中 村 美 知 枝
都 立 清 瀬 東 高 等 学 校	井 上 浩

◎世話人

○副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 町 田 廣 泉

研究主題

生徒一人一人の個性を生かし、制作意欲を高める指導の工夫

目 次

1	主題設定の理由 研究の構想	1
2	研究の仮説 研究の方法	2
3	授業研究	4
	「ユニットをもとにしたアクリル工芸」－CDラック等の制作－	4
	「墨絵を描いた団扇（うちわ）をつくる」－伝統技法と個性のかかわり－	8
	「短時間課題の研究」	12
	「版画によるイラストカード作り」－身近な美術をめざして－	16
	「オリジナルの絵本をつくる」－自分のイメージを大切に－	20

研究主題「生徒一人一人の個性を生かし、制作意欲を高める指導の工夫」

1 研究主題設定の理由

個性尊重や個に応じた指導が教育の在り方として求められている。このことを高等学校の美術教育の中でとらえようとしたとき、表現や鑑賞の活動を通して生徒がいかに自分らしさを確認して自己を表現できる授業が展開できるかが大切である。

しかし、現実には授業の中で課題に対し意欲を示さなかったり、積極的に取り組まなかったり、途中で制作が行き詰まって放棄したりする生徒が多い。

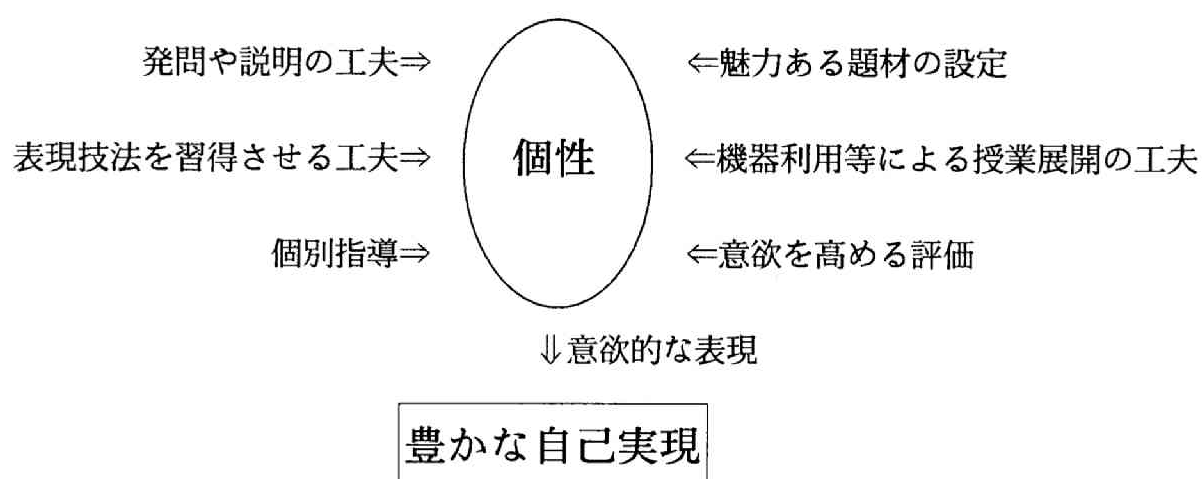
このような実態や生徒の生活感、自意識の変化を十分に把握した上で、生徒一人一人が意欲をもって制作に取り組めるようにするためには、教師の働きかけとして一層の指導方法の工夫や改善が求められている。本研究部会では、このことを踏まえて研究主題を「生徒一人一人の個性を生かし、制作意欲を高める指導の工夫」と設定して、授業研究を主体に本年度の研究を推進してきた。

研究にあたっては、次の4つの観点から考察を行い、研究の構造化と題材設定から指導の工夫に至る実践的な内容を中心とした。

4つの観点

- (1) 高等学校の美術における個性とはなにか
- (2) 高校生の制作意欲とはなにか
- (3) なぜこの主題が必要か
- (4) 各自が工夫した指導とは

2 研究の構想



3 研究の仮説

人は本来、自分の思いや願いを表現したいという欲求をもっている。美術においては、その欲求を色や形といった造形要素を生かした表現により自己実現を行っている。しかし、表現に至る過程は生徒一人一人さまざまである。発想・構想に時間をかける者、表現方法に凝る者、展示や解説にこだわる者などがあり、それぞれの生徒が表現における充実感を得るためには個に応じた指導が求められる。

そこで、本研究では、教師が美術の授業における個性を正確に認識し、生徒が興味・関心を抱く題材設定を行ったり、指導計画の工夫・改善を行うことにより生徒の制作意欲が高まれば、自分らしさを伸び伸びと表現できるだろうと考えた。

4 研究の方法

研究の方法については、4つの観点を以下のように検討した上で、それぞれを関連させながら年間を通して各学校において授業実践と記録を行い、その成果と今後の課題についてまとめた。

高等学校の美術における個性とはなにか

- 生徒それぞれの制作過程や作品に表れた特徴である。
- 自己と他の違いを認識して、それを表現する力である。
- 自分で表現したもののなかに自分らしさを発見するとともに、他の人が表現したもののよさを共感できる力である。
- 思考力、判断力、心情、技能のバランスの上に成り立ち、社会的な協調の上に発揮されるべきものである。



個性の発揮を促すためには

- ◎表現上の個性を発揮するためには、基本的な技能の習得が必要。
- ◎伸び伸びと表現できる教育環境や題材の設定が大切。
- ◎授業を通しての人間形成に留意。

高校生の制作意欲とはなにか

- 自ら積極的に課題に取り組めること。
- 生きる力、生活する力（興味・関心を含めて）を発揮すること。
- 自意識が表現欲求につながること。



制作意欲を高めるためには

- ◎興味・関心をもち、能動的に取り組める課題設定。
- ◎期待感、見通し、作品化の過程が生徒自身に把握できる授業の実施。

なぜこの主題が必要か

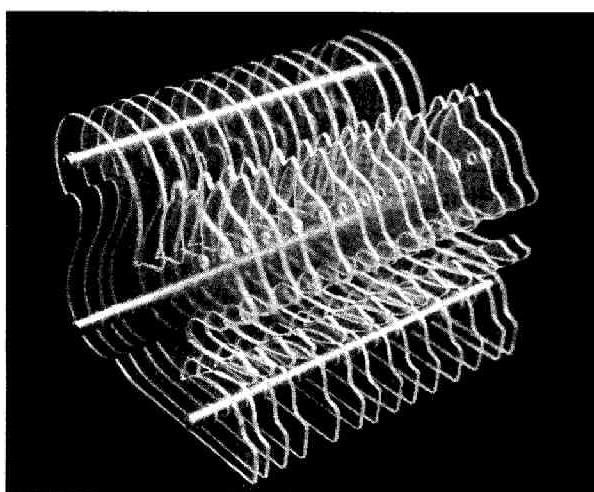
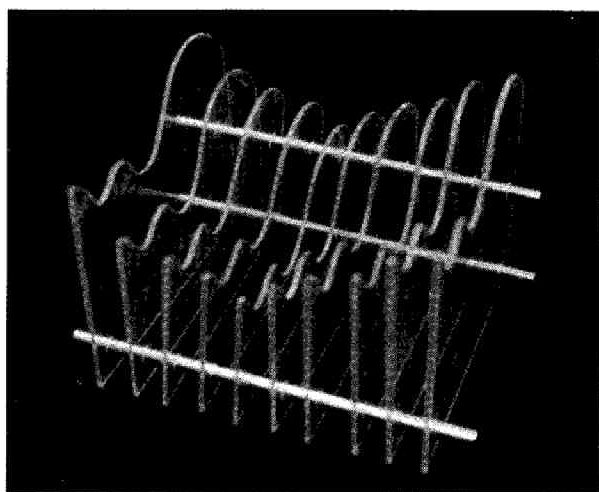
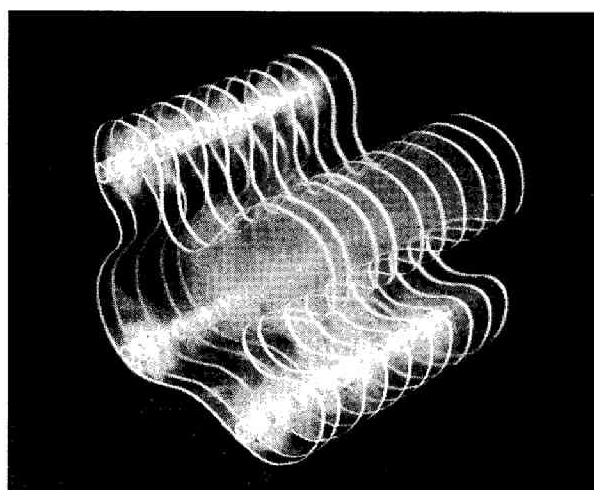
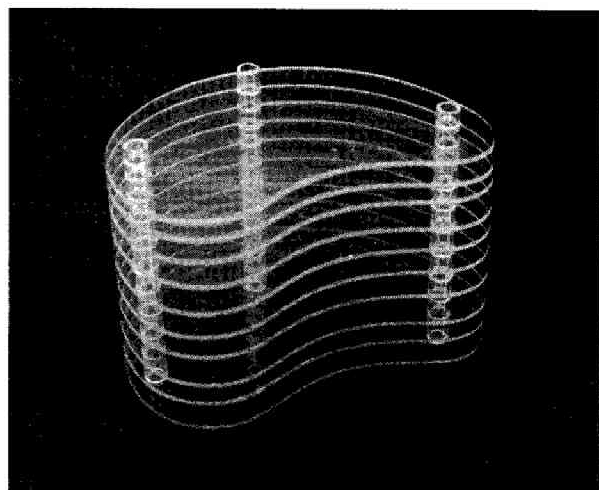
- ◎生徒の実態に沿った授業改善の必要性。
- ◎生徒の多様化、意欲の欠如に対応できる指導と評価の工夫。
- ◎自我の確立、他との共感ができる場の設定。



各自が工夫した指導とは

- ◎美術を苦手とする生徒でも容易に取り組める素材や制作手順の設定。
- ◎日本画の伝統的な技法を実生活に生かす題材の設定。
- ◎イメージをそのまま定着させる短時間課題の設定。
- ◎身近な材料や用具を使い、日常生活で使える版画制作。
- ◎絵本の内容を自由に選び、生徒自身が計画し、制作する題材の設定。

《ユニットをもとにしたアクリル工芸・生徒作品》



授業研究

「ユニットをもとにしたアクリル工芸」

－CDラック等の制作－

1. 研究のねらい

美術工芸の学習領域にはさまざまなものがある。時間の限られた授業の中ですべてを網羅するわけにはいかないが、個人的には素材やテーマがよく取り上げられるものばかりでなく、日常生活の中にとけこんでいる身近なものにも注目し、学習の内容が一つの分野に偏らず多種類の造形的な経験をさせたいと考えている。

また一方では工芸や立体造形の制作に苦手意識をもつ生徒も多く、授業にのりきれないケースも目にしている。工作の嫌いな生徒に聞くと、立体的な造形や工芸的な内容は、絵画などの平面的な造形にくらべ、「すぐにできない」「手間がかかる」「(工作上の)技術が必要」「絵を描くようにうまくできない」「失敗する」等の理由で敬遠されているようである。もちろん生徒の安直な感想という要素もあるが、手間がかかったり、ある程度の工作上的技術の習熟が要求されるものが多いのもまた確かな事実である。

本研究ではアクリル板を用いて身近な実用品を制作させる中で、立体造形、工芸的な領域におけるこれらの問題点を少しでも解消し、多くの生徒が自分の考え(アイデア)や工夫を取り入れながら、意欲的に取り組めるような題材の設定や指導上の工夫をしてみたい。

2. 指導のねらい

- (1) 紙による試作、製図、素材の加工練習を制作の前に行わせ、制作における計画性の意味を理解させる。
- (2) 身近な実用品をつくることで実用性とともな造形的な美しさ、個性的なアイデアや考え方を取り入れさせる。
- (3) 素材の加工作業を通じて素材の特色や用具、工具の使い方を理解させる。

3. 評価の観点

- (1) 実用性をめざした制作になっているか。使用上の安定性や、使いやすさを考えているか。
- (2) アクリル板の素材を生かし、美しい形体の表現を追求しているか。
- (3) あたりまえのものにならず、自分なりの工夫を行っているか。

4. 展開例

《材料・用具》

- ・ アクリル板〔2 mm 透明およびエッジカラー4色〕
- ・ アクリル、桂材、アルミ、真鍮の丸棒
- ・ やすり〔金属用棒やすり（荒目・細目）、耐水研磨紙（600～800番）〕
- ・ アクリル用カッター
- ・ 接着剤〔アクリル用〕
- ・ 電動糸のこ機、電動グラインダー、ボール盤

《授業の流れと指導のポイント》

(1) 紙によるユニット練習 2 h

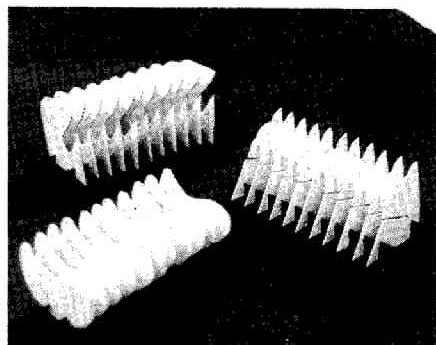
「ボール紙で5×5 cmの正方形を10枚つくり、それをもとに同一の形を多数並べた時に、全体として美しく見えるようにユニットの形をつくりなさい。」

- ・ 特に実用品を意識しないでユニットの連続した美しさやおもしろさを紙による試作の中で体験させる。

(2) アクリル板の加工練習 2 h

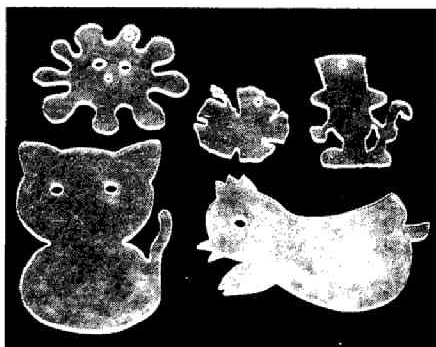
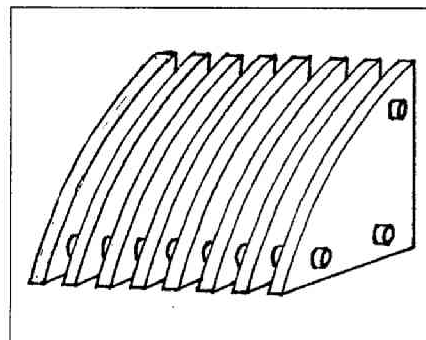
「小さなアクリルの板1枚を各自自由にデザインし、切り抜き、穴をあけ、切断面にやすりがけをなさい。」

- ・ 糸のこ機による裁断、ボール盤による穴開け、やすりがけ等を練習する。



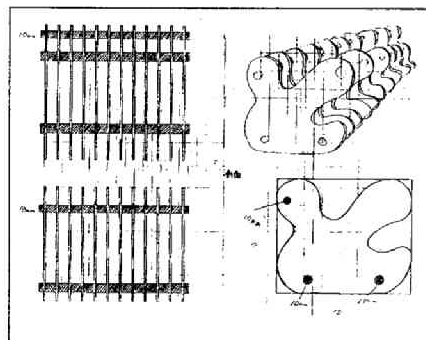
←ユニット練習

ユニットによる→
基本構造



←アクリル板
加工練習

原寸による製図→



(3) 課題の説明 1 h

『アクリル板で任意の同一形または相似形を複数つくり、一定の間隔をとって積み重ね、あるいは並べ、それを数本の支柱によって支えるという形の構造をもとにして、CDラック等、卓上の実用品をつくる。』

- 一枚の形をどのようなものにするか。(幾何的 有機的 具象的等)
重ねる、並べることによって美しい形、使いやすい形になるように工夫すること。
実際に使用するCD等を入れた時にはどうかということも考える。
- ユニットの枚数は特に限定しないが、一人分(61×45cmの板1枚)の材料の中でつくれる範囲、また実用品として使いやすい範囲で考える。
- 色は透明およびエッジカラー4色(ピンク・オレンジ・グリーン・バイオレット)の中から自由に選ぶ。一つの作品に何色か混ぜてもよい。

(4) アイデアスケッチおよび原寸による製図 3 h

- ユニットの形は基本的には同一形であるが、あまり単調にすぎる場合は、並べ方、重ね方に工夫をさせる。(ユニットの形は変えずに1枚ごとの高さに変化を加えたり、相似形を用いるなどの工夫をさせる。)
- アイデアスケッチが決まったら原寸で製図をさせる。(1mm方眼紙350×500mm)第3角法で行わせるが、あまり形式にはこだわらず、製図を見ながら作品がつくれるようにする。またユニットを支える支柱の位置は実用性、安定性を決定する重要な要素である。図面の上に実際のCDケースなどを置きながら工夫させる。

(5) 本制作 8 h

① アクリル板の裁断(カッター、糸のこ機による)

1枚のユニットがおさまる矩形をもとに1人分のアクリル板(61×45cm)に、枚数分の矩形を描き、カッターで切れ目を入れ、手で折りながら切断する。切断した後、ユニットの形に型紙をつくり、それに合わせて糸のこ機で裁断する。

② 切断面の処理(やすりがけ等)

裁断したものをすべてまとめてテープで固定し、切断面に荒目のやすりをかけ、荒削りをする。仕上げは金属用の細目やすり、耐水ペーパー(600～800番)をかける。

③ 支柱のための穴あけ

支柱を通すための穴をボール盤であける。(8mmφまたは10mmφ)
これもすべてまとめて固定した状態で行う。

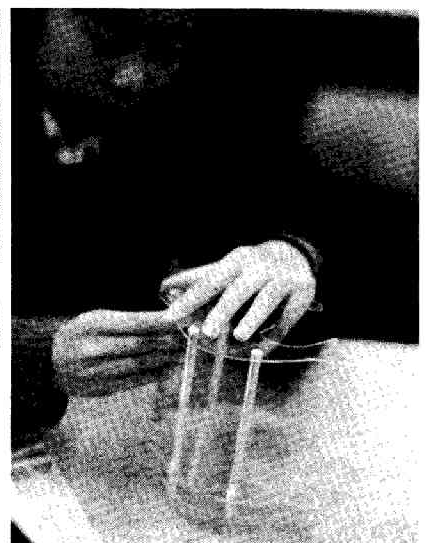
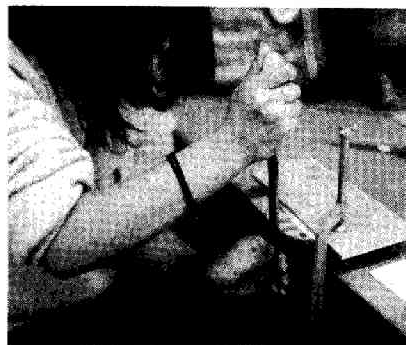
④ 支柱の切断

アクリル、桂材、アルミ、真鍮の丸棒の中から選ばせる。

アクリル、桂材は糸のこ機、のこぎりで、アルミ、真鍮は金のこまたは切断機を用い、切断面はグラインダーをかける。

⑤ 組み立て（差し込み、接着による）

切断した支柱にあらかじめユニットが入る位置に鉛筆等でうすくしるしをつけておく。支柱をアクリル板に通し、きちんとおさまったら速乾性の接着剤で接着する。



〈 制 作 風 景 〉

5. 考察および課題

■授業全体の中では、アイデアスケッチ・製図の段階までが生徒それぞれの個性的な表現や工夫をする上で重要な意味をもっている。いきなり制作課題に入らず、事前に練習課題を行わせ、ユニットの並置や積み重ねに視覚的な美しさやおもしろさを感じさせたり、アクリル板の素材的な特色をよく理解させた上で自由な発想を出させるように指導した。完成した作品はこちらで予想したほど同じようなものにならず、生徒それぞれが自分のデザインをもとめているものが多かった。

■原寸による製図は最初はやや不安であったが、実際に行わせるとほとんどの生徒は描くことができ、またCDケースなどをその上に置きながら検討することができて制作のためにわかりやすく、有効であった。

■できるだけ簡単な技法でつくることが一つのねらいであり、全体にはほとんど問題なく制作できていた。ただ、カッターによる切断や糸のこ機による裁断はそれなりに抵抗のある生徒もいたようである。材料の加工は今後は個々の生徒についてもう少し丁寧に指導していきたい。

■身近な実用品をつくるということで生徒の制作意欲は全体的にだいぶ高まっていたようである。いつもは工作、工芸の苦手な生徒、意欲の希薄な生徒でも興味、関心をもって取り組んでいた。また軽量で、透明感のある美しさをもつアクリル板を用いたことも制作に興味をもたせたようである。

「墨絵を描いた団扇（うちわ）を作る」

—— 伝統技法と個性のかかわり ——

1. 研究のねらい

簡単なスケッチやクロッキーは描く楽しみを与えてくれる。短い時間に完成できることと、手を動かす筋肉運動の快感がある。これはまた描く対象を既に描く側がより直接的、個性的に抽象化している行為の結果である。

しかし、スケッチやクロッキーは下絵、素描、練習作品という部分が強く、作品としての存在価値が弱く、発展的な完成作品とつながりにくい。したがって生徒にとっても当然制作意欲へもつながりにくく短絡的行為で終わってしまう可能性が高い。

そこで、墨絵でスケッチやクロッキーの手法、つまりドローイングの道具として活用することでより内面的、個性的作品の具現化をはかる。加えてそれを「団扇」という実際に使えるものに仕立てることで、より作品の存在価値を高めようと考えた。これは一方、生徒の個性と制作意欲をさらに高める相乗効果があると期待でき、授業実践をもって研究を試みた。

2. 指導のねらい

- (1) 日本古来の道具、素材（文房四宝）の価値を再認識することができる。
- (2) 基本技法を生かして、一人一人が個性的な作品をつくることができる。
- (3) 実際に使えるものを作ることで制作意欲を高める。

3. 指導のポイント

- (1) 課題の設定について

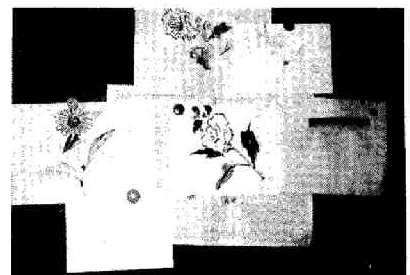
「画仙紙に描いたオリジナルの墨絵をもとに団扇を作る」

- (2) 制作意図を伝える

- 墨、硯、筆、紙の性質を知りその価値を味わうことができるようにする（文房四宝）
- 基本技法の練習後、オリジナル作品を描けるようにする。
- 文化祭などでも活用できることを示し制作意欲を図る。

- (3) 材料と道具について

- 材料 —— 画仙紙（23cm×28cm）
竹骨、縁テープ（60cm）
- 道具 —— 筆
墨、硯、文鎮
（アクリル絵の具、ステンシルスポンジ）



(4) 指導の実際

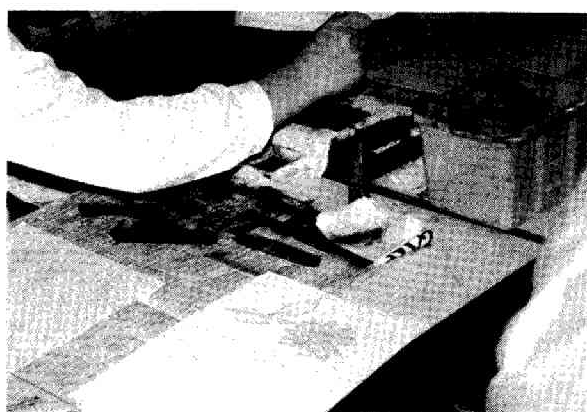
■ 行程 —— 4 回（2 時間×4 回）

- 1 回目 基本練習 —— 筆法の練習
- 2 回目 オリジナルモチーフをスケッチする
- 3 回目 スケッチをもとに作品を描く
- 4 回目 団扇に組み立てる

■ 指導のポイント —— 1 回目の展開（100分）

展開	時間（分）	指導内容	留意点
導 入	10	道具の配布	◦ 2 人に 1 セット
	10	道具の解説	◦ 文房四宝
	10	墨絵の概論	◦ 松煙・油煙墨、画仙紙 ◦ 墨を摺りながら
展 開 1	20	① 直筆と側筆 ② “なす” を描く ③ “椿” を描く ④ “竹” を描く	◦ 八運筆法 ◦ 墨のふくみをたのしむ ◦ 全体へよく見えるように
展 開 2	30	自由練習と清書	◦ ②③④から 1 枚提出
整 理	10	黒板へ作品提示	◦ 濃中淡の効果 ◦ 筆勢の表情 ◦ 予告
あとかたづけ	10	道具の返却	◦ 水洗いの確認 ◦ 分類別返却

道具



練習作品



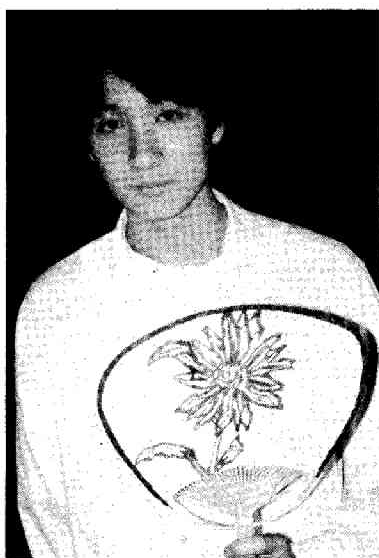
4. 評価の観点

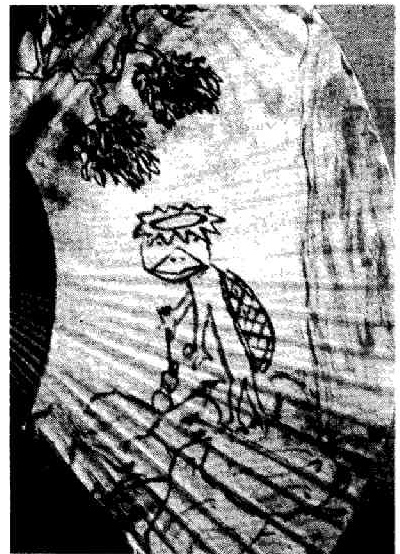
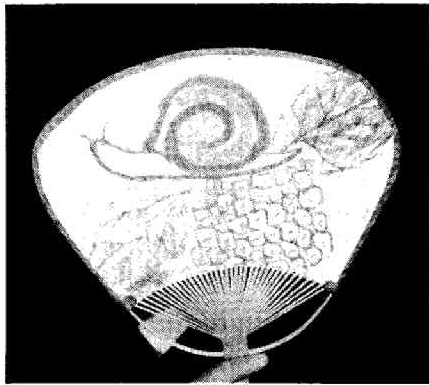
- | | | |
|---|---|------------|
| (1) 濃墨をもとに三墨（濃中淡）をつくることのできる。 | } | 1 回目 |
| (2) 直筆と側筆の筆法を理解する。 | | |
| (3) なす、椿、竹を練習し、(1)(2)を確認する。————— 提出 | | |
| (4) オリジナルモチーフを探しスケッチする。（具象とする） | | 2 回目 |
| (5) スケッチをもとに濃淡を生かし作品を完成する。 | | 3 回目 |
| (6) 丈夫に美しく団扇を組立てる。（裏側は自由とする） ——— 提出 | | 4、5 回目 |

5. 組み立て



6. 完成作品

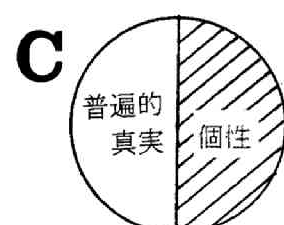
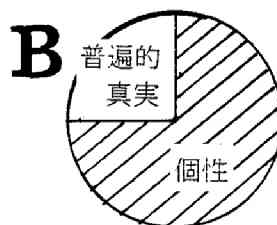
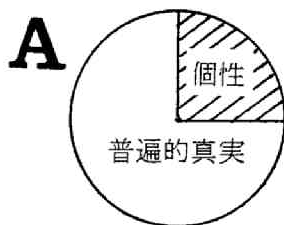




7. まとめ

(1) 「墨絵と団扇」のねらいについて

今回は学校教育の目的を、普遍的真理の授与と個性の確立と考えた。これは一見矛盾したことのように思えるが、前者は基礎で後者が応用で、全体としてトータルのものと考えたことによる。美術教育は個性を大切にする性格から前者の部分が少ないように思えるが、教材によって下図のように分析でき、「墨絵と団扇」は◎に当たり、前者と後者がほぼ半分に位置していて、個性が基礎力を土台に発揮されることを期待した形である。



① 模写や規定の強い課題 ② 自由テーマの油絵 ③ 使用目的のあるポスター

(2) 制作の実際

多くの生徒が、墨と筆と和紙の意外な表情に驚きを示し、興味深く取り組んだ。古くて以外に新しい素材であると認めることができた。

団扇はこの時節（9月）に様々な種類が市販されており、各家庭でも利用されている。この事が手づくりのオリジナル作品を作ってみようという制作動機を生むきっかけとなった。また文化祭に活用できることもその一助となった。

(3) 墨絵と教材について

今後、絵葉書、団扇、動物、屏風、凧など日本の伝統文化を土台にした教材が種々考えられる。生徒の実態や施設設備の状況も、教材の課題条件として配慮しながら、伝統文化の伝達を目的とした授業に重要な意義を認めたい。

「短時間課題の研究」

1. 研究のねらい

授業において、構想から完成までに長時間掛ける課題には完成の成就感を味わうことと、作業の計画性を身につけることの意義がある。しかし、年間の授業がそれだけになってしまふと次のような問題点が浮上してくる。

- ・発想や表現欲求を、そのままイメージとして定着する力を伸ばす時間がほとんど無い。
- ・長時間掛けた課題が失敗してはならないことから、無難にまとめる方向で仕事をしがち。
〔個性表現の抑止〕
- ・ひとつの表現を安易に再現する傾向が生徒に定着する。〔既成の表現の無批判な借用〕
- ・評価の偏り。〔発想がユニークでも、作品化していく技術の未熟な生徒はどこで認められるのか？〕



——しかし生徒が様々な角度から自由に発想する時間を設定することで、上記の問題点の解消になっていくと考え、長時間課題の前後や合間に年7回程度、1、2時間で行う「短時間課題」を取り入れてきた。そこでは技術的なものは取り敢えず気にせず、自由に発想するという立場から、「描くこと」「つくること」をより身近に感じ、結果として柔軟で即応的な感覚が養われていくということを目的とする。

また、長短2種の課題があることで、年間の授業の流れに変化が付き、生徒は様々な角度から美術をとらえる機会を得る。一方考える側は、長時間課題だけでは見えなかった生徒の個性の側面を発見できる。

以上から「短時間課題」について、その「生徒一人一人の個性を活かし制作意欲を高める」内容の開発を目指し本研究を行った。

2. 指導のねらい

「短時間課題」では柔軟で新鮮な発想の自由性や、短い時間の中でそれを定着する力を養う。最終的には美術の授業の総体としての、生命感ある瑞々しい発想や、各人の個性豊かな表現を絶やさないことを目的として指導する。

3. 指導のポイント

- (1) 色や形を整えることに腐心するよりも、各人の個性に従って思いついたアイデアを自由自在に表出、展開できるよう指導する。

- (2) 美術に苦手意識を持った生徒が自分の長所を見つけたり、美術の面白さを知る機会となるよう考える。
- (3) ここで養われた自由で柔軟な発想やその展開が、長時間課題と補完し合い、双方の能力がバランス良く伸びるよう指導する。



4. 評価の観点

豊かな発想や、柔軟な展開が見られたか。

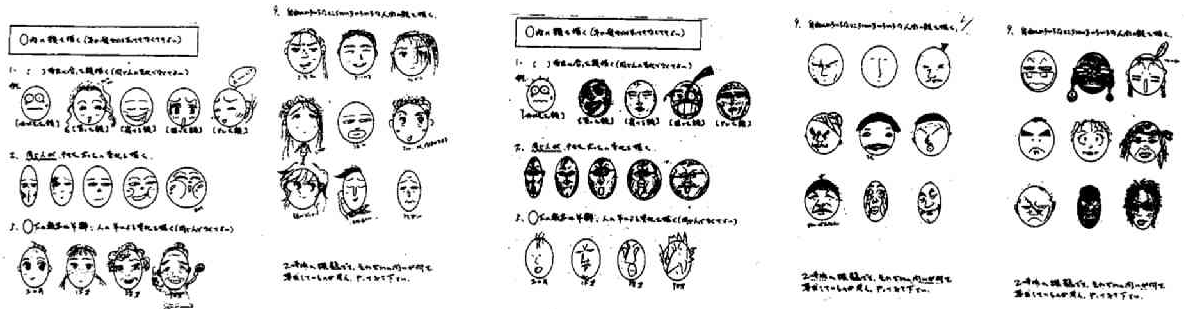


○短時間でしかだせない世界に普段着の自分が出ることも多い。

5. 展開例

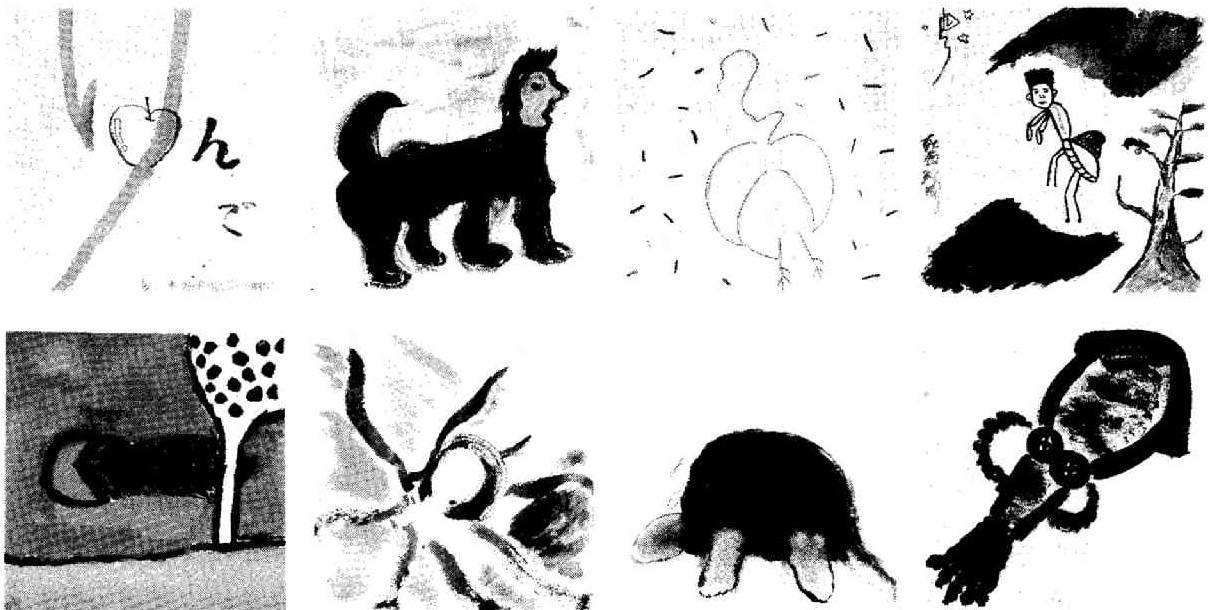
- (1) プリント課題として出題したもの

(例)「同じ人の太る痩せる、年齢による変化を描く/様々な人の顔を楕円の中に描く」



- (2) 画材を指定した例(長時間課題の単純小規模型)

(例)「水彩で生物を表現」

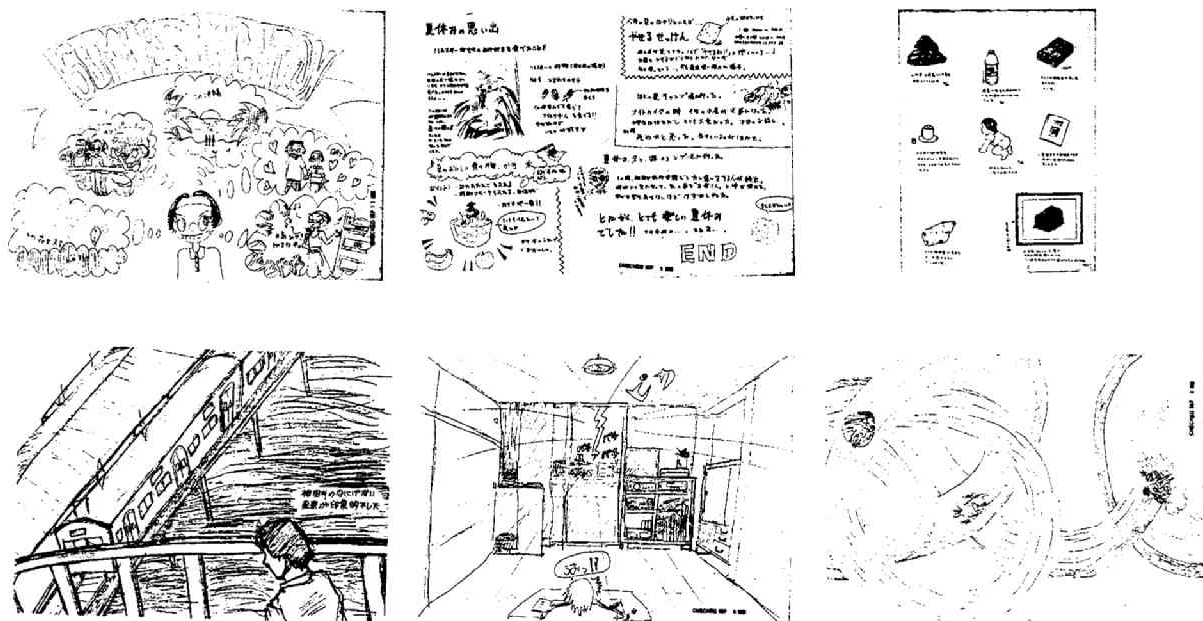


(3) 葉半紙に行ったもの

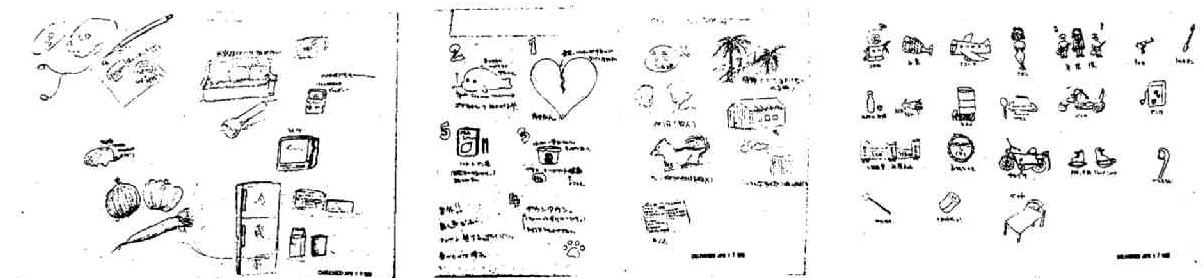
(例)「オリジナルの缶入り飲料のデザイン/胸飾りのデザイン(効能書きも)」



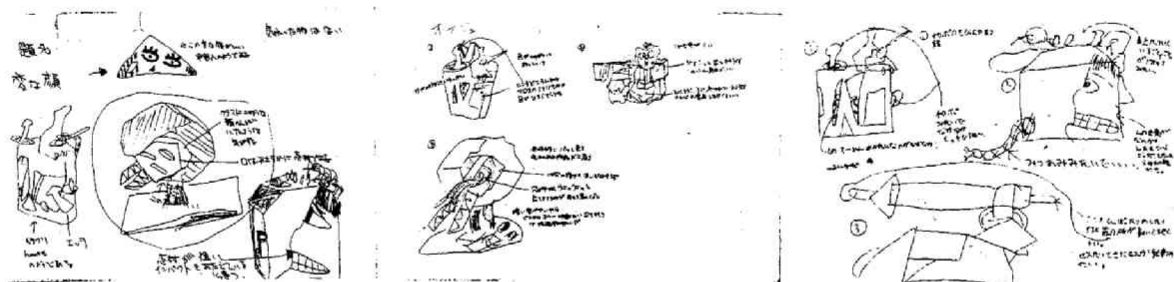
(例)「この夏したこと、あったこと」



(例)「自分にとって、この世に必要なもの」



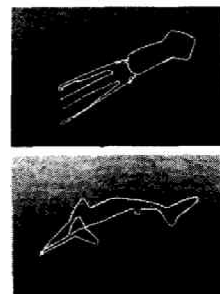
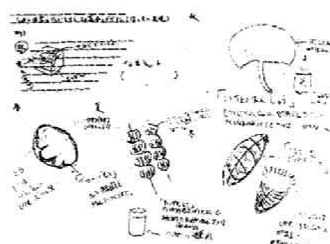
(例)「友だちの作品(オブジェ)を好意的に對する」



(例)「外国人に日本を、他校生に自分の高校を紹介する」

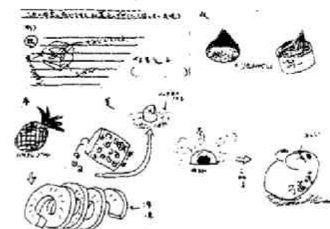


(その他の例)「よく行く店を紹介する」、「レモン(向日葵など…)を自分のイメージで表現する」、「四季それぞれ4つの菓子をデザインして説明する」、「四コマ漫画で表現する」等。



(4) 工芸的なもの

(例)「はり金(＃20、80cm)を使って生物を表現する」



6. 考察

この「短時間課題」を導入した結果、ではどんなところにその実が上ったのかというと「短時間課題」を行わずに年間を進めたことが一度もなく、比較できないこともあるが、限られた時間の中でその顕著な課題の効果を見いだすことは難しい。しかし、長短2種類の課題で変化をつけて授業を行うことは、なお有効である。長時間作業の連続ばかりから来るマンネリ化を防ぐことができるし、なによりも生徒の個性のバランスある育成のために必要と考える。そして生徒たちがこれに生き生きと取り組んでいることは、その様々な作品からも事実として実感できる。

しかし、「短時間課題」を次の長時間課題にどう効果的に反映させていくかは課題の残るところで、それは教員の研究と工夫に大きく依っている。

今後も整理分析を重ね、長短双方の課題が有機的効果的に結びつき、より高い総体としての美術の授業となるよう努めていきたい。

「版画によるイラストカード作り」－身近な美術をめざして－

1 研究のねらい

どの生徒も、自分を何らかの方法で表現したいという欲求は持っているものである。しかし、絵を描くことで自己を表現することに抵抗感があり、絵を描くことが苦手であると考えている生徒も多い。けれども、絵画には抵抗感のある生徒でも、イラストには親近感を抱いている場合が多く見受けられる。

そこで、イラストによるカード作りという身近なテーマを選び、版画という直接描いたものではない題材を選ぶことで苦手感を少しでも減らし、のびのびと自己を表現できればと考えた。

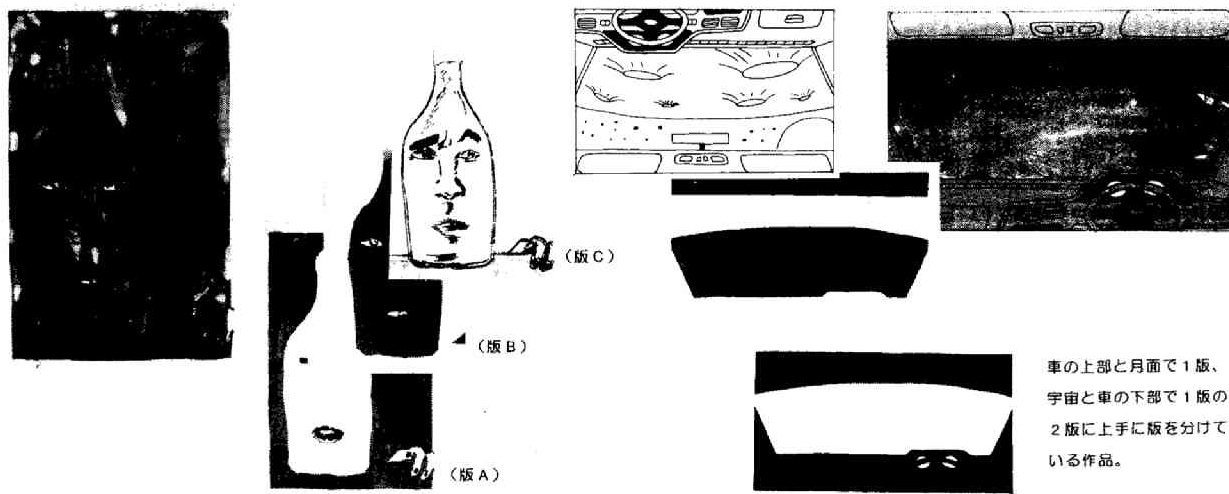
また、卒業後に年賀状などで版画に取り組む事ができれば、学校の授業という場を超えて美術が日常の中に生きたものになるのではないかと考えた。

2 指導のねらい

- (1) 自分の考えを、作品に作り上げる喜びを味わわせる。
- (2) 自分の作品や他の生徒の作品等を鑑賞することで、それぞれの個性によった作品のすばらしさを体験させる。
- (3) 年賀状等に活用できる授業を体験することで、美術をより身近なものにさせる。
- (4) 版画のいろいろな技法や代表的作品を学ぶとともに、市販の孔版印刷機という身近に手に入れることのできる版画素材を通して孔版技法についての理解を深めさせる。

3 評価の観点

- (1) 自分なりの表現方法を探し、作品として表現することができたか。
- (2) 従来の表現を越えて、自分なりの表現を深め、工夫することができたか。
- (3) 課題に進んで取り組み、いくつものアイデアを考えることができたか。
- (4) 版画の技法を理解し、工夫ができたか。
- (5) 自分や友人の作品のそれぞれのすばらしさを感じることができたか。
- (6) 準備、片づけに進んで取り組むことができたか。



版 A、B に置く絵の具の色を工夫して水彩風多色刷りにした作品。

車の上部と月面で1版、宇宙と車の下部で1版の2版に上手に版を分けている作品。

4 展開例

(1) 課題の設定

題材名 「スクリーン版画によるイラストカード作り」

(2) 材料、用具の準備

- ・スケッチブック（アイデアスケッチ用）
- ・はがき用紙（一人20枚）
- ・製版用ランプ（一人6個）
- ・インク各色（100人で70～80本位）
- ・ペーパーパレット、パレットナイフ（混色用）
- ・その他 クリーナー、チューブ絞り器、新聞紙など
- ・市販の孔版印刷機（6台～7台）
- ・製版用マスター（一人3枚）
- ・製版用原稿用紙（一人5～6枚）
- ・製版用のペン（30～40本）
- ・乾燥用のカード置き（クラス人数分）

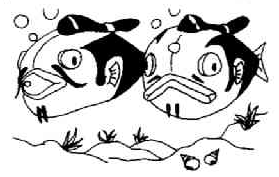
(3) 指導の実際

階段	時数	学習の流れ	指導の要点	指導評価の観点
導入	1	版画全般について 版画にはいろいろな 技法があり、それぞ れの技法を使った すばらしい作品のあ ることを知る。	凸版、凹版、孔版、平版とそれぞ れの版画の特徴、代表的技法と作品 を知る 浮世絵について、技法と代表的作 品を知る。	版画の技法と 作品について理 解を深めること ができたか。
	1	その技法の中のひ とつであるスクリー ン版画の中のプリン トゴッコを使うこと を知る。	技法について付属のビデオを見る。	
展開	3～4	アイデアスケッチ テーマを知り、そ れに従ってアイデア スケッチを4つ以上 描く。 今回のテーマ； 窓の中と外 瓶の中と外 鏡の中と外 表の顔と内なる心	アイデアをいくつか出すことは、 生徒の一番苦手とすることであるが そこで考えに考えることで今まで生 徒の中に眠っていた新たな表現を引 き出せるのではないかと考えている。 また、実際の作品としては、週に 2時間では1年間でいくつも作るこ とができないのでこういった場所で 表現の可能性を広げようと考えてい る。	テーマに沿っ てアイデアスケッ チを4つ以上描 くことができた か。 自分なりの作 品を工夫できた か。

テーマを決めないと、既成のキャラクターでカードを作る生徒が多くでてしまう。

二つのものを対比するテーマを設定することで、形のみでなく色相対比や明暗対比などの工夫をする生徒もでてくる。

写真のコピーなどを使いコラージュ風に仕上げることもできることを知らせる。



アイデアスケッチの中から気に入ったものを一つえらび、簡単に着色をして印刷の時のイメージをつかむ。

1～2 下図の制作

4 版の制作

3版に絵を分けて版を作る

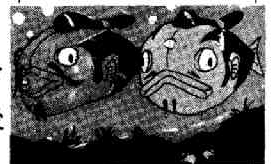
基本としては、色版2版と墨版1版に分ける。

窓ガラスに版を重ねて貼り3版がずれないようにする。

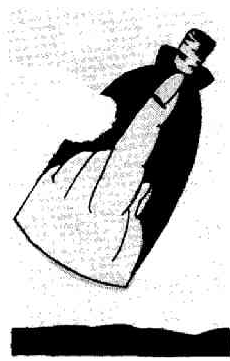
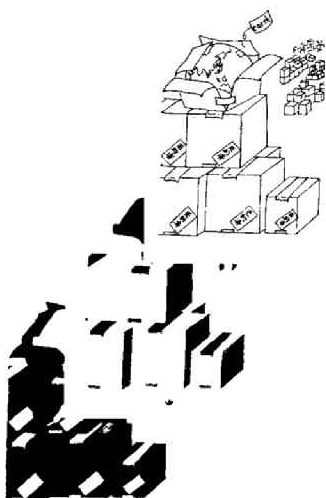
墨版を最初に作ってから行くと簡単である。

3版で無理な場合は、自分で版をさらに用意するか、刷り上がった後で色鉛筆などで描き加える。

アイデアスケッチにしたがって版を作ることができたか。



魚のはく泡に紙の白を利用した作品。



色のついた紙を使って紙の色も利用した作品。

3版全部に色を使って、墨版にこだわらずに作った作品。

4	製版、印刷 製版をする。3版がずれないように注意する。 好みの色を作り、インクを置いていく。 印刷する。 2版め以降の印刷。 提出	ビデオをもう一回見て技法を再確認する。 1版ずつ色を置いては印刷すること、薄い色の版から印刷することを注意する。 試し刷りの用紙に印刷した後、一人20枚ずつ印刷し乾燥台に置いて乾燥させる。 同様に印刷していくが、ずれてしまった場合は位置合わせをする事でぴったりと合わせることができる。 提出形式に従って2枚提出、残りは持ち帰る。 作品のサイズが小さいので、イレパネ等に入れて校内などに飾ることができる。	製版、印刷に自分から取り組めたか。
---	---	---	--------------------------

(参考 提出形式)

5 考察および課題

- 市販の孔版印刷機という特定の会社の技法を使っていることで、体験できる技法に偏りがでてしまう点は感じている。しかし、簡単に多色刷りができ、近所の文房具屋で購入できる身近な素材である点はよいと思っている。
- テーマを設定してカード作りを行っていることはよいと思うが、どのようなテーマを選ぶかは今後さらに工夫が必要と考えている。
- この課題の発展形として、同じ市販の孔版印刷機を使って別の授業で名刺を作らせている。パソコンで自分の名前、住所のフォントやサイズを選び、それをプリントアウトしたものに自分のマークをデザインしたものも加えてレイアウトさせ名刺を作らせている。文字のサイズ(ポイント)、フォントを体験させたり、レイアウトの基本を工夫させることができたように思う。
- コンピューターを活用して、写真等をスキャナーでとりこみ加工してからイエロー、マゼンダ、シアンに分けてプリントアウトすることができれば、写真を使ったフルカラーのカードを作ることにもできるはずなので今後の課題としていきたい。

0	
(作品)	(作品)
(テーマ)びんの内と外	
(下図)	(下図)
(下図)	(感想)
2839 大山太郎	

「オリジナルの絵本をつくる」～自分のイメージを大切に～

1 研究のねらい

最近では、小さなこどもだけでなく大人まで楽しめるような芸術性の高い絵本が出版されており、また、世界に一冊しかないオリジナルの絵本を手作りしようという試みも広く行われている。絵本には絵本でなければ表現できない世界があり、作者のイメージやアイデアを生かして自由に内容や形式を考えることができるという大きな魅力がある。

今回この題材を取り上げたのは、オリジナルの絵本制作が多様な興味や関心を持つ生徒ひとりひとりの個性を尊重し、表現意欲を具体化することができる題材であると考えたからである。

本研究では絵本制作の過程で、生徒ひとりひとりが自由な発想をふくらませ、完成まで意欲的に取り組めるような題材の設定や指導上の工夫に焦点をあてて授業研究を行うこととした。

2 指導のねらい

- (1) 自分の個性や特性を生かし、独創的な作品を発想、構想する力を養う。
- (2) 絵本の内容、形式、表現方法などを考え、計画的に制作しようとする意欲、態度を育てる。
- (3) 制作上必要な技法や材料用具を考え、自分で準備し、主体的に制作する態度を養う。
- (4) 相互の作品の鑑賞を通して、自分とは違う発想や表現を感じ取る鑑賞力を育てる。

3 評価の観点

- (1) 自分の個性を生かして、自由な発想をすることができたか。
- (2) 絵本の制作過程を理解し、計画表を立てることができたか。
- (3) 表現意図に合わせて、材料や用具を準備することができたか。
- (4) 効果的な技法を使って表現し、制作することができたか。
- (5) お互いの作品に興味を持ち、発想や表現の工夫を感じ取ることができたか。

4 展開例

(1) 課題の設定

題材名・「オリジナルの絵本をつくる」～自分のイメージを大切に～

(2) 指導のポイント

- 市販の絵本の多種多様な内容やスタイルについて知らせ、興味を持たせる。
- 制作する絵本の内容、表現はオリジナルのものとする。
- 見開き3ページ以上の枚数のものとする。
- 内容はストーリーのあるもの（連続もの）とそうでないもの（単発もの）とを選択させる。
- 計画表を作成することで完成までの見通しをもたせる。
- 下描き用紙にアイデアスケッチを描かせ、イメージを明確にさせる。
- 内容、形式、表現方法、表現材料用具などについて計画表にまとめさせる。

- 絵本制作の手順表を配布し、製本の方法を理解させる。

(3) 材料、用具の準備

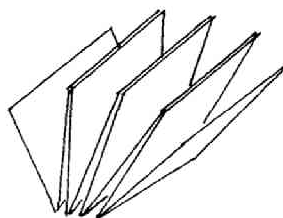
- ・下描き用紙、(364×203(mm))
- ・本文用用紙(ケント紙、画用紙、ワトソン紙)、(364×203(mm))
- ・表紙用用紙(レザック紙)、(450×280(mm))、一人1枚
- ・見返し用紙(ミューズコットン紙)、(364×203(mm)) 一人2枚
- ・表紙の芯用厚紙(厚さ2mmで200×175(mm))、一人2枚
(厚さ2mmで200×5(mm))、一人1枚
- ・ガーゼ、和紙
- ・のり、ボンド、カーボン紙、クランプ、カッター、定規など

(4) 指導の実際

段階	時数	主な学習活動	指導の要点	評価の観点
導入	2	・題材について理解する ・絵本の作品を見てその種類や内容、表現方法などの多様さを知る	・物語の絵本、詩の絵本、知識を楽しむ絵本、ナンセンスな絵本、仕掛けのあるもの、文字のないものなどできるだけ沢山の種類の絵本を用意する	・題材に興味を持ち、絵本について理解を深めることができたか
発想・構想	6	・計画表に沿って絵本の全体計画を立てる ・自分の表現したい内容についてよく考える ・下描き用紙にアイデアスケッチを描く	・横書き、縦書きにより、開く方向、絵の進行方向が変わる ・紙の折り目となる中央に絵の大事な部分を入れない ・絵と文章は用紙の端より1cm以上内側に描く	・計画表を作成することで全体的な見通しをもつことができたか ・独創的な内容、形式を考えることができたか
制作	6	・ケント紙、画用紙、ワトソン紙の中から、各自の表現方法、材料に合った本文用用紙を選ぶ ・完成した下描きを参考にして本文用用紙に描く(カーボン紙を利用しても良い) ・内容にそった表現方法、材料で仕上げていく	・表現方法(写真、抽象、イラストレーション、版画、ステンシル、コラージュ、スパッタリング、マーブリングなど)の具体的な効果について例をあげて指導する ・水彩絵の具、パステル、カラーインク、色鉛筆などがどの用紙に効果的か ・文字の字体や色にも注意を持たせる	・ていねいに作業できたか ・表現方法や技法について工夫し、適切な材料を用意することができたか

・完成した本文を背あわせに貼り合わせる

・本文の両端に谷折りにした見返しをつける

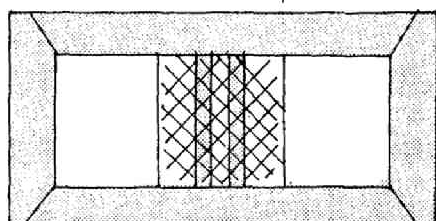


・クランプで挟み、しばらくおく

・表紙の紙の裏面に芯用厚紙3枚とガーゼ1枚をボンドで貼る

・表紙の四隅をカットする

・表紙の長い辺から折り返してボンドで貼る



長い辺から先に折り返しボンドで貼る

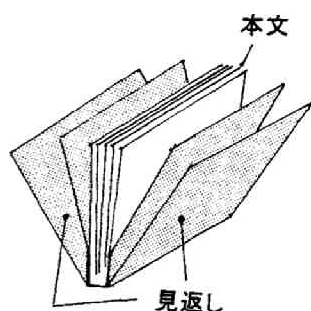
・クランプで挟み、しばらくおく

・本文の背以外の周囲を5mmカットする

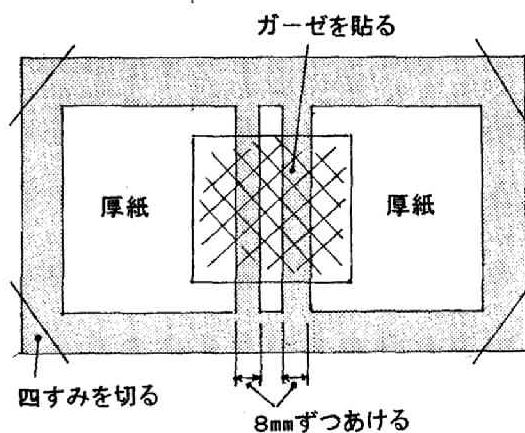
・本文の背に和紙を貼る

・開く方向に注意して貼り合わせる

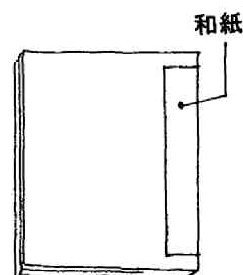
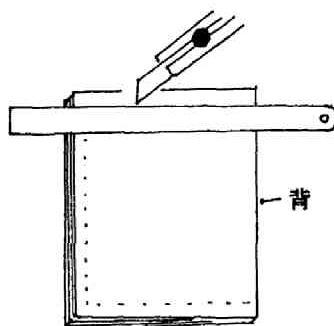
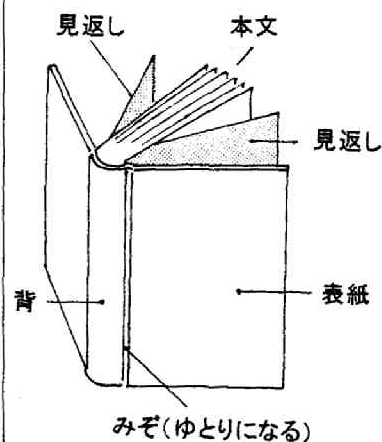
・見返しは背から2cmだけ貼り付ける

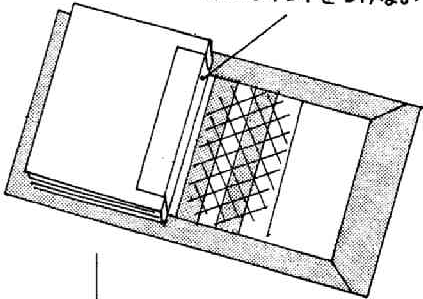
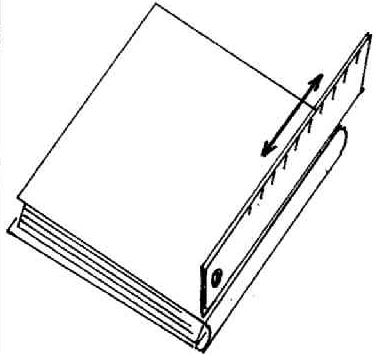


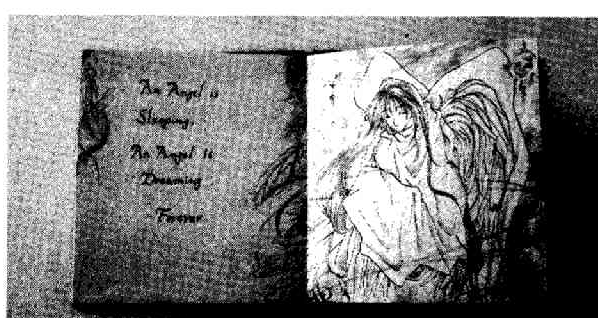
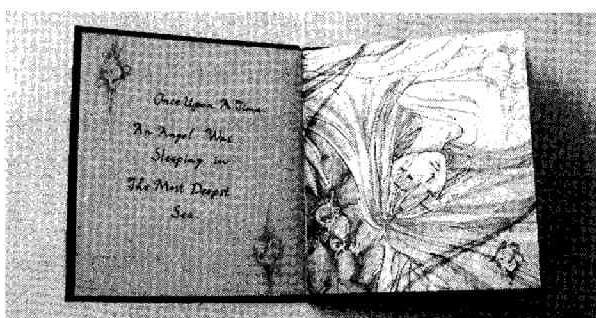
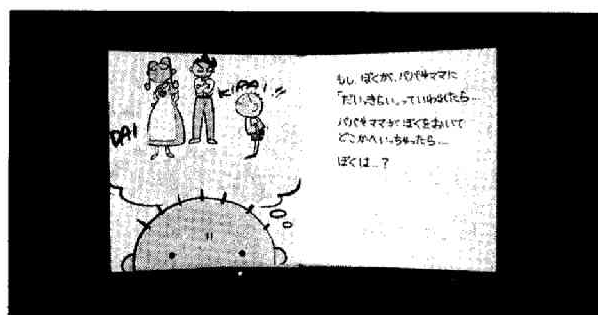
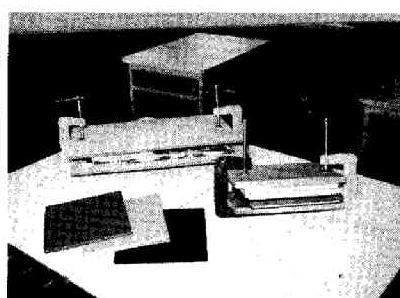
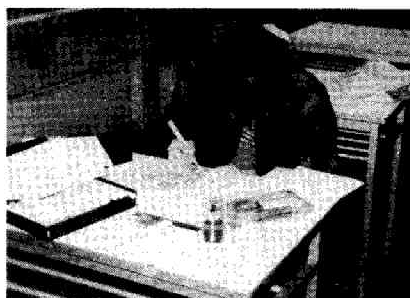
・ボンドは芯用厚紙の全面にしっかりつける

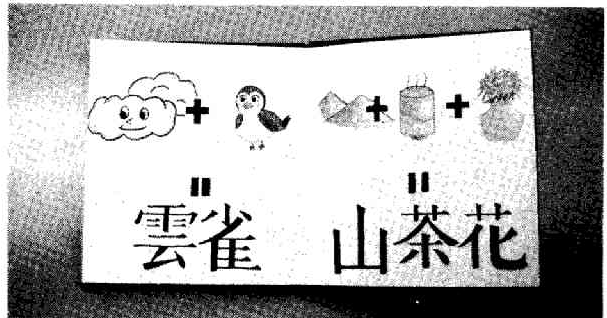
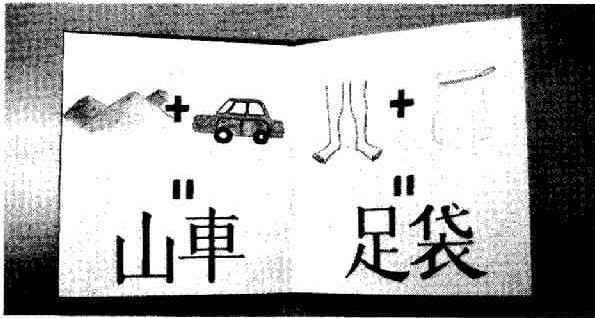
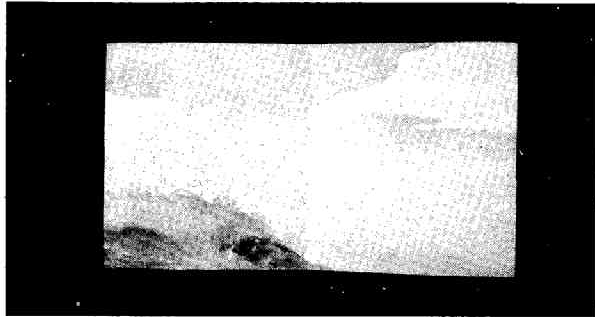


・ていねいに作業できたか



		・表紙と本文を貼り合わせる ・クランプに挟んでしばらく乾かす	・本文の両端の見返しにボンドをつけて表紙に貼り付ける。このとき、本文の背にはボンドをつけない 	
		・余裕があれば表題を工夫する	・定規等でみぞをつけると開きやすくなる	・完成まで意欲的に取り組めたか
鑑賞	1	・相互に作品を鑑賞する		・自己評価で自分を見つめようとしているか ・友人の作品の良さに気づいたか





5 まとめ

- 3年次の選択美術の課題としてこの題材を設定したのは、サインペンやカラーインクなどを使ったイラストレーションの表現を得意とする生徒が多いこと、1、2年次にいろいろな表現技法を経験していることなどの理由からである。
- 3年次の2学期の課題としたのは、美術の卒業制作という意識で取り組んでほしいという意図があったためである。ほとんどの生徒がその期待に答えてくれたが、進路決定という心身ともに落ち着かない時期であったこともあり製作意欲を高めきれなかった生徒が何人かいた。
- 当初、絵本は小さな子ども対象のものという意識の生徒が多かったが、芸術性の高い表現内容の絵本を見せることでその捉え方が変わっていったようである。
- 内容には制限を与えずに自由としたが、それが制作意欲を高めたケースと、逆にそうでないケースがあった。中には、新しいものを発想することが苦手な生徒も何人かいたため、既成の詩や作詞をもとにそのイメージを絵に表すというような方法を提示したり、既成の絵本の部分的な模写も大目にみる結果になった。
- 絵本の大きさは一律としたが、描画材、本文の紙の種類、表紙、見返しの色などを選択できるようにした。自分の絵本のイメージに合わせてトータルに考える機会になった。
- 結果的に手軽な描画材（サインペン、色鉛筆、パステルなど）を使用する傾向になった。なお、少数ではあるが、自分で染めた和紙の貼り絵や、しかけを工夫したものがあつた。
- できあがった作品の内容は多種多様であり、作者の人柄が感じられる心温まるものが多かった。将来の自分の子どもに見せるためにと心を込めて制作している姿も見ることができた。

今回実施したような選択の幅のあるオリジナルの絵本制作は、生徒ひとりひとりのイメージを大切に、個性を生かすことができる題材としての可能性があることがわかった。